

『戦争症候群』（ジャン・バコン著）という本によると、ここ 4000 年の歴史の内、3723 年間は戦争がどこかで行われていた状態であったようです。また、戦争終結後、「やっぱり平和は大事だ」という反省に立ち、8400 ほどの平和条約が各国家間で結ばれていったのですが、その平均寿命はたったの 2 年しかなかったようです。実はこの本、戦争は、経済的にも、人口問題から言っても、ナショナリズム、金儲け、憎しみのはけ口、物を発明するという観点からも一番効果的であり、そういう意味で、戦争ほど素敵で、文化を創り出すものはないというような論調で書かれています。もちろん、これは皮肉です。著者は、敢えて嫌というほど戦争の美点を数え立てることで、人間の歯止めのない貪欲さを描き出し、戦争を始める正当な理由をいくらでも作り出すことができる人間の問題性を浮き彫りにしていったのです。

本日の聖書箇所で、イエスは「わたしが地上に平和をもたらしするために来たと思うのか…言うておくが、むしろ分裂だ」（51 節）と語っています。その分裂の例として、父と子、母と娘、姑と嫁の間に起こる分裂が示されています（53 節）。思わず耳を疑うような言葉ですが、何もイエスは家族を仲違いさせたいのではありません。当時、つながりが深く、救いの運命さえも保証すると考えられていた血縁関係や親族内の関係でさえ、神の前には絶対的ではないことが示されているのです。よく考えてみると、私たちの内に根強く備わっているものの見方や考え方のなかには、おおよそ家族のなかで培われてきた価値観が土台となっているものが少なくありません。イエスを信じて生きていくなかでは、そのような、これまで自分が正しいと信じて疑わなかった価値観と対立し、決別しなければいけない時もあるということでしょう。

イエスは、私たちを救い出すために、「受けねばならない洗礼がある」（50 節）としています。これは、イエスが担った十字架の出来事を指しています。そこでは、弟子の裏切りから見えてくる人間の脆さ、罪なき者を罪人だと信じて疑わず、殺していった人間の過ちが浮き彫りにされています。イエスの十字架は、私たちが「正しい者」ではいられない現実を示しているのです。戦争や対立は、お互いの悪意のない正義のぶつかり合いから始まります。主イエスの言葉は、時に、そのような私たちの信じ切っている「正しさ・正義」とのつながりを引き裂き、神の前に一人の人間であるという関係性へと私たちをつなぎ直されます。真の平和をもたらしために。

（文責：望月達朗牧師）

